

『全国方言談話データベース 日本のおるさとことば集成』にみる
日本語諸方言のフィラー

杉浦 滋子

キーワード：日本語、フィラー、方言、助詞化

要旨

本稿では自由発話のデータベースである『全国方言データベース 日本のおるさとことば集成』を講演、職場での会話と比較して、「エ（ー）」「エ（ー）ト」の比率が低く、「マ」の比率が高いことから、これらが自由発話という談話タイプの特徴だとした。さらに、フィラーにどのような方言的差異が見られたか述べた。また、フィラーには語彙形式由来のものがあるが、一部方言には共通語に見られない「見よ」という意味の語彙形式がフィラーとなっていること、一部方言で「ほら」にあたる形式と二人称代名詞が音韻的な独立性を失って助詞化していることを指摘し、後者はまずフィラーとなってから助詞化したと主張した。

1.研究の対象

実際の発話においては、伝達内容に関わらない発声が少ないから見られる。次の発話にもそのようなものがいくつか含まれる。

(1) アノー ホラ エー ハイトリクグモ ッテ ユーノ。

あの ほら えー ハエ取りグモ って 言うの。

アノ コーユグアイニ アノー ナンテ ユーノカナー アノー

あの こういう 具合に あの 何て いうのかなあ あの

クチバシミテーナ テー モッテル ヤツガ

くちばしみたいな 手[を] 持っている ものが

(『全国方言データベース 日本のおるさとことば集成』東京 17A より)

日本語のこういった要素についての研究では「言いよどみ」(小出 1983)、「無意味語」(山下 1990)、filled pause (有声休止) (Watanabe 2009)、「フィラー」(山根 2002)などの名称が用いられ、対象に含まれる要素も研究により違っており、機能についても沈黙の回避、時間稼ぎ、発話ターン継続の示唆、注意喚起、和らげなど、研究により挙げら

れているものは異なる(山根 2002 に詳しい)。様々な立場を大きく二つに分けるならば、「意味をもたない音声」ととらえる立場と、「発話における非流暢性」ととらえる立場である¹。前者の例として、山根(2002)のフィラーの定義「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない、発話の一部分を埋める音声現象」が挙げられる。「言いよどみ」「有声休止」などは後者の立場にたった名称である。どちらの立場に立つかによって生じる違いのひとつとして、発話末の要素を含むか否かという点がある。「意味をもたない音声」という立場に立つなら、発話末の要素も含めて論じることになるが、「発話における非流暢性」という立場に立つなら、発話途中の音声は対象になるが発話末の音声は対象にならないだろう。総じて前者の立場に立つ場合には研究対象は後者の立場に立つよりは広くなると思われる。本稿では発話末の要素も対象に入れて考察する。

2. フィラーの種類と頻度

Watanabe (2009)は、現代日本語の自発音声のデータベースである『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)に含まれる987の学会講演ファイル(総時間274.4)と1715の模擬講演ファイル(総時間329.9)から性別・年齢・成育歴・フィラーの含有数を考慮した上で120の学会講演ファイルと同数の模擬講演ファイルを分析の対象とした(以降、Watanabe (2009)の分析したデータ範囲に言及する場合はCSJ (Watanabe)と記載する)。CSJでは以下の形式をフィラーと認め、そのようにタグ付けしている²。

- (2)あ(一)、い(一)、う(一)、え(一)、お(一)、ん(一)、と(一)*、ま(一)*、
 あ(一)(ん)の(一)*、そ(一)(ん)の(一)*、
 う(一)(ん)(一)(っ)と(一)*、あ(一)(っ)と(一)*、ん(一)(っ)と(一)*
 ※上記すべてのフィラーとの組み合わせ：～ですね(一)、～っすね(一)
 ※上記「*」との組み合わせ：～ね(一)、～さ(一)
 ※括弧内は任意

Watanabe (2009)は(2)のCSJの基準に従った上でこれらを頻度と音特徴により「アノ」「エ」「エト」「マ」「ソノ」「エ以外の母音とンの組み合わせ」「その他」の七種にまとめた。このグルーピングにおいては母音の長音と促音を含む子音の長音が捨象されているので、例えば「エット」と「エート」は同じ「エト」として扱われる。その結果前者でフィラー全体の99%となったため、前者者に「母音および子音の長音化」を加えた

¹ 田窪・金水(1997)のように、研究対象として含まれるもの全体に名づけを行わず、「応答詞」「感動詞」といった品詞分類を用いるものもある。

² なお、CSJは「あーあ」「あっちゃー」「ぎょっ」「うおー」などの感情系表出助詞に下記のフィラーと同じFというタグをつけている。

七種を分析対象としている。母音の長音化は CSJ で H、子音の長音化は CSJ で Q とタグ付けられており、Watanabe (2009)は長音化が「フィラーとして話者にプランニングの時間を与えるため (p.38、筆者和訳)」含めるとしている。ただし、CSJ で H、Q とタグ付けられたものの中には「すっごーい」のような語末以外の子音の長音化と母音の長音化をも含まれる。このようにデータを扱った結果、総語数の中のフィラー率が 8.1%であることを報告している。

Watanabe (2009)は CSJ の分析結果から学会講演より模擬講演においてフィラー率が優位に高いこと、女性より男性において優位に高いこと、20 代話者 (1970 年代生まれ) より 30 代・40 代話者 (1950-60 年代生まれ) において優位に高いこと、「エ」の使用が女性より男性において優位に高いこと、「アノ」の使用が若い話者より年配の話者において優位に高いことなどを報告している。太田他(2006)では CSJ の学会講演、模擬講演、対話 (学会講演インタビュー、模擬講演インタビュー、課題志向対話、自由対話) を分析し、CSJ で F とタグ付けられた要素が学会講演・模擬講演ではそれほど違いがなく、対話で多いことを報告している³。山根(2002)では CSJ がフィラーとしたものに加えて「コー・ソー」「コノ・ソノ・アノ」「ナンカ」類、「ネー」類、「ハイ」類、「モー」をフィラーとして、講演・留守番電話・対話・電話対話の四タイプの談話を分析し、講演と対話において男性の方がフィラーの使用の頻度が多いという頻度の性差と、母音型のフィラーの使用が男性に多いという種類の性差を報告している。中島(2011)は現代日本語研究会の『女性のことば・職場編』(1997)を資料とし、「アノ (一)」、「マー」、「エー」は雑談より会議や打ち合わせで多く出現し、また「アノ (一)」、「マー」、「エー」が 30 代以下の話者よりも 40 代以上の話者により多く使用されていると報告している。

このようにスピーチレベル、性別、年齢により使用するフィラーの種類と頻度が異なることが指摘されている。方言によっても用いられるフィラーの種類が異なることが予想されるので、本稿では『全国方データベース 日本ふるさとことば集成』(以降『集成』)のデータを用いて方言におけるフィラーの使用の実態の分析を目標とした。なお、沖縄のデータは他のデータとの隔たりが大きいので、分析の対象としなかった。

3. 『集成』に見られるフィラー

3.1 全体的な特徴

『集成』では一都道府県について一地点で 2 名から 6 名の話者のデータがあり、データの量は一地点について 5 分 28 秒から 46 分 52 秒 (平均 29 分 19 秒) である。一地点ごとの収録時間は量的には少ないが、今回調査した範囲 (沖縄のみを除く) の収録時間

³ ただし、この結果は次の二点の違いのため Watanabe(2009)の結果と直接の比較はできない。(i)上で述べたように CSJ は感情系表出助詞にも F とタグ付けているため、太田他(2006)はこれらの助詞を含めるが、Watanabe (2009)では含めていない。(ii) Watanabe (2009)は講演者が原稿を読み上げている講演、フィラーが 10 以下の講演をあらかじめ除いている。

の合計は22時間40分あり、ある時期(1977-1985年)に収集された日本語自由発話のコーパスととらえることができる。そのようにとらえてCSJ(Watanabe)及び中島(2011)の分析した『女性のことば・職場編』と比較した。なお、CSJ(Watanabe)の収録時間についての情報はないが、公表されている講演と模擬講演の総時間数からそれぞれの平均を計算して推定した収録時間は56時間40分であり、『女性のことば・職場編』の収録時間は朝職場に着いてからの談話3時間41分、会議・打ち合わせでの談話2時間18分、休憩時の談話3時間13分、合計9時間12分である。Watanabe(2009)はフィラーの7カテゴリーの結果を表1のように示している(Watanabe 2009表3-2、筆者による和訳)。『女性のことば・職場編』および『集成』では総語数の情報がないため比率を比較することとした。またWatanabe(2009)は長音化を考察対象に含めているが、CSJがFとタグ付けした要素には語彙項目内のものが含まれていること、そして他の要素が音韻的に独立しているのに対し長音化はそうではないことを考慮し、Watanabe(2009)の7つのカテゴリーのうち前6種の比率を比べることとし、グラフ化した。なお、表2は中島(2011)に記載のある形式の出現数からWatanabe(2009)のまとめ方にしたがって計数した。『集成』のデータにおいて、「アノ」には「アン」を含め、「ヨ」「サ」「ナ」などの終助詞が続くものも含めた。「エト」には「(ウ)ン(一)ト」を含めた。「ソノ」には「ソン」を含め、「ヨ」「ナ」などの終助詞が続くものも含めた。

表1 フィラーの7のカテゴリーの平均度数と平均頻度

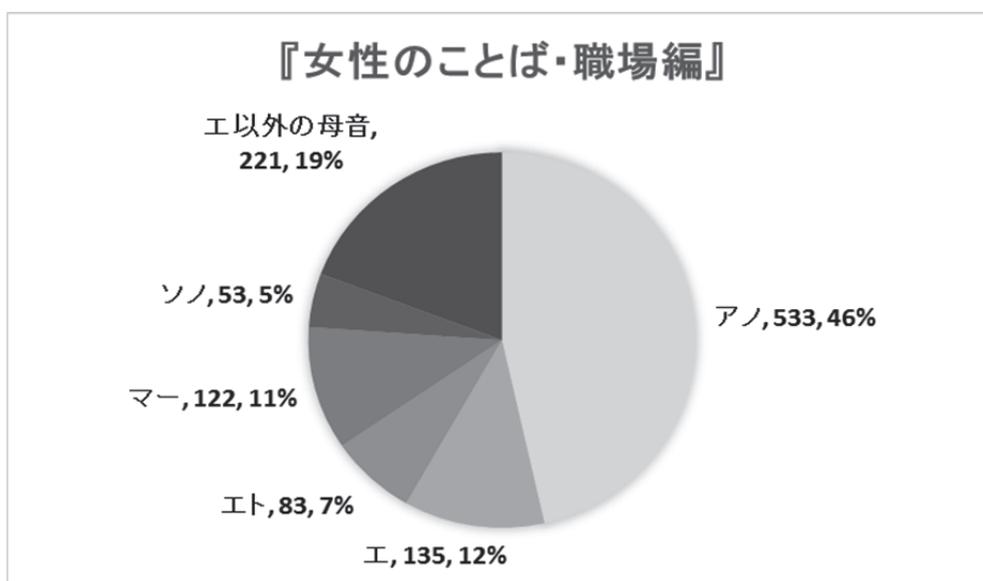
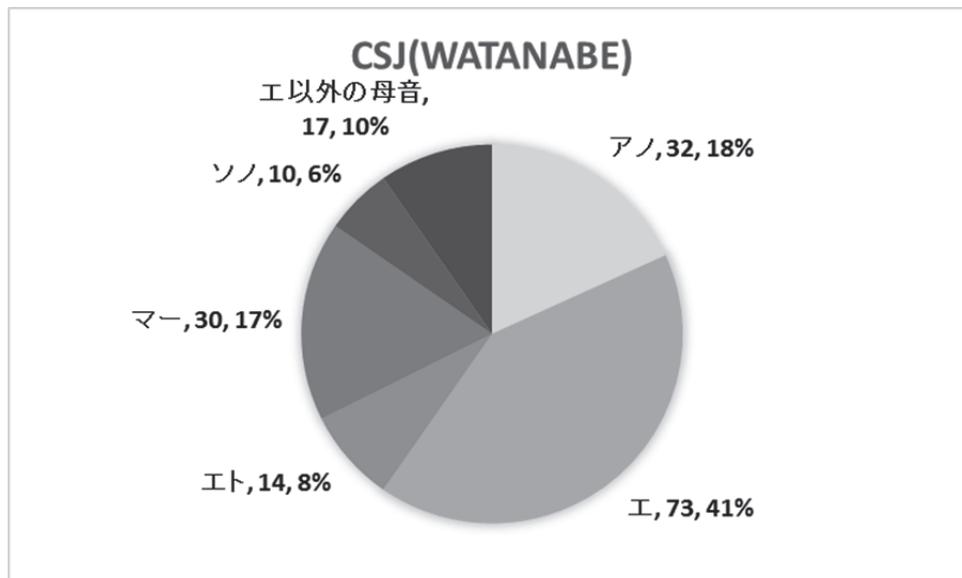
	エ	アノ	マ	母音	エト	ソノ	長音化	合計
度数	73	32	30	17	14	10	55	231
語数比率(%)	2.4	1.1	1.1	0.6	0.4	0.3	2.2	8.1

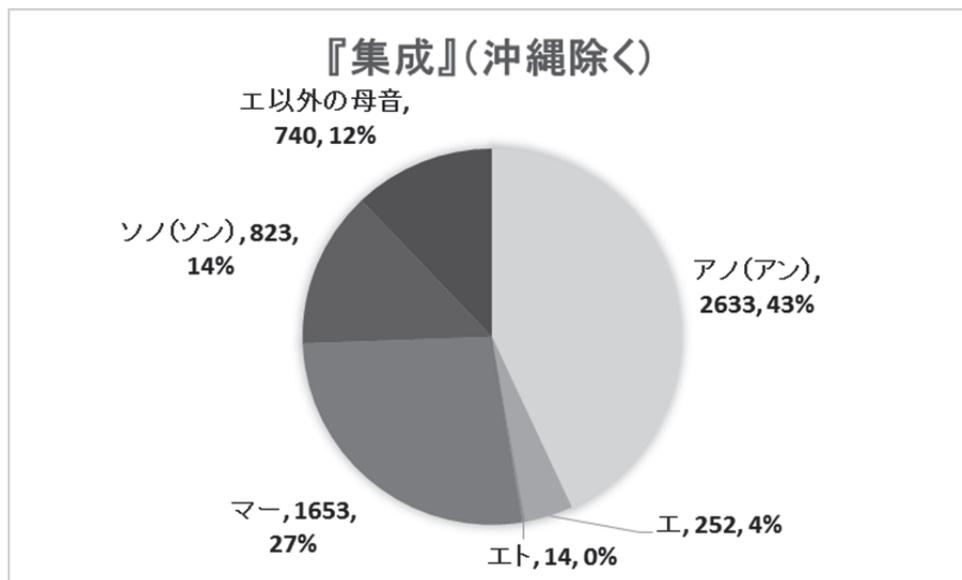
表2 『女性のことば・職場編』の6のカテゴリーの出現数

	エ	アノ	マ	母音	エト	ソノ	合計
出現数	135	533	122	221	83	53	1147

表3 『集成』(沖縄除く)の6のカテゴリーの出現数

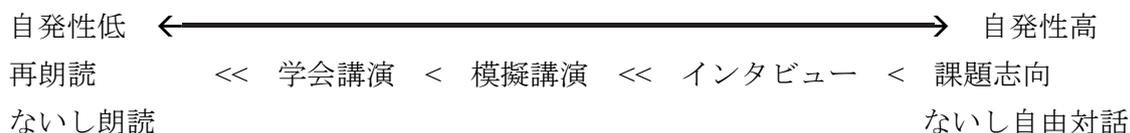
	エ	アノ	マ	母音	エト	ソノ	合計
出現数	252	2633	1654	740	14	823	6426





『女性のことば・職場編』『集成』ではCSJ(Watanabe)より「アノ」の割合が高く、「エ」の割合が低い。「エ」が一対他のフォーマルな場面で用いられるのに対し、「アノ」は双方向の場面で用いられるのである。そして、「エト」がCSJ(Watanabe)『女性の言葉・職場編』である程度見られるのに対して、『集成』では少ない。また、中島(2011)はフィラーを分析するにあたって『女性のことば・職場編』の談話の場面をインフォーマル(雑談)、フォーマル(会議・打ち合わせ・相談)と電話中の3種に分けている。職場での電話を雑談ではないと推測して電話中をもフォーマルに含めると、「エト」83例のうち79例がフォーマルな場面で、4例がインフォーマルな場面で使用されていた。このことから、「エト」は一対他のパブリックな談話および仕事に関わる職業上の談話で用いられ、パブリックでもなく職業的でもない日常会話では頻度が低いことがわかる。

前川(overview.pdf)はCSJの中の音声の自発性の序列について次の序列を想定している(p.11)。ジャンルの境界が<で示されている場合は、<<で示されている場合よりジャンル間の違いが小さいと想定されている。



自発性とは談話をその場で作り上げていくことであるため、そのスケールはフォーマルかインフォーマルかというスケールとは異なる。インフォーマルな場面で自発性が低いという場面は考えにくい、フォーマルな場面で自発性が高い場面、つまり改まり度の高い場面での自由対話は存在し、職業上の会議・打ち合わせ・相談がそれにあたる。

自発性の低い学会講演・模擬講演で「エ」の比率が相対的に高く、自発性の高低に関わりなくフォーマルな場面で「エト」の比率が相対的に高く、インフォーマルな場面で「マ」の比率が相対的に高いことになる。

3.2 『集成』に見られるフィラー

この節では『集成』データに見られる方言の差異を見ていく。

まず、母音と「ン」はそもそも意味をもたない非言語音である。しかし、学会講演・模擬講演で「エ」が他の談話タイプより多く用いられるということは、「エ」がそのようなタイプの談話において特定の機能を獲得したという点で「エ」以外の母音のもたない言語体系の中の位置を占めていることを表す。また、「エ」「ン」が「ト」の後接が可能であることはこれらが「エ」以外の母音のもたない言語体系の中の位置を占めることを表す。非言語音由来のフィラーについて方言の間の違いを論じるのは難しいので、それ以外のフィラーを扱う。

3.2.1 「あの」に相当する形式

(3a)のように終助詞「ネ」が後接しない「アン」という形が栃木、富山、奈良、和歌山、広島、香川、愛媛、大分、宮崎のデータで見られた。(3b)のように「ネ」「ナ」が後接する「アン」は千葉、新潟、兵庫でも見られた。「アノ」に後接する終助詞として「ネ」が宮城、千葉、東京、神奈川、群馬、新潟、山梨、大阪、京都、島根、高知に、「ナ」が岩手、兵庫、香川、徳島、山口、大分のデータに見られ、「ヨ」が宮城のデータに見られた。香川のデータには「アノ」に「ゴー」「ゴラン」が後接する例が見られた(3c,d)⁴。

(3)a. アノヒトワ アン マ カンケー ナイサカイナー

あの人は あの まあ 関係[が] ないからねえ。(『集成』奈良 68A より)

b. アンネ イッピーョー ニヒョーッテネ モッテッテ

あのね 一俵 二俵とね 持って行って (『集成』新潟 103B より)

c. ホイテ アノーゾー、アソコエ ドクワン スエテナ シトロ。

そして あのね あそこへ 土管[を] 据えてね しているだろう。

(『集成』香川 124B より)

d. アノーゴラン マー X40 サンキワ モー イッチャッテ

あのね まあ X40 さんのうちは もう いつだって

⁴ 『集成』香川の解説に『ゴラン (御覧)』に由来すると見られる『ゴ』『ゴー』がある(p.29)との記述があり、公開されたデータの中のない「ゴラ」の例も挙げられている。なお、「ゴ (一)」は「ダスヨリンゴー」(42B)のように助詞に後接する例、「イテンゴー」(96B)のように動詞の中止形に後接する例があったが、「ゴラン」は(3d)の一例のみであり、解説の「ゴラ」の例も「アノー」に後接する例である。

オソインジャ

[仕事が]遅いんだ (『集成』香川 132B より)

3.2.2 「その」に相当する形式

(4a)のような「ソ (一) ン」という形式が千葉、愛知、大分、宮崎、熊本、鹿児島
のデータで見られた。これらはすべて終助詞の後接がなかった。(4b)のような「ホノ」と
いう形式が岩手、宮城、山形、石川、兵庫、徳島のデータで見られた。「フノ」という
形式が岩手で見られた。「ソノ」に後接する終助詞として「シア」(秋田)、「ヨ」(秋田)、
「ナ」(山形、愛知、兵庫)が見られた。『集成』秋田解説には念押し・強調の助詞とし
て「シャ・シア」が挙げられている。

- (4a) ソシテ モー ソン ガッチュ マーン ヨージガ アッチェ
そして もう その 本当に まあ 用事が あって
(『集成』鹿児島 209C より)
- b. ホノ マー ナンゾニワ イットンダロケンドナー
その まあ 何か[の本]には 入っているだろうけれどねえ
(『集成』徳島 78C より)

3.2.3 「まあ」に相当する形式

驚きを表す感動詞「まあ」、十分ではないが一応という意味の「まあ」もあるが、次
のような「まあ」はどちらでもなく、フィラーとして扱われる。

- (5) ダカラ ベツニ ソノ ショクリンノホーノ マー ソガイニ
だから 別に その 植林のほうの まあ 障害に
ナラナイ ワケダケドナー。
ならない わけだけどね。(『集成』神奈川 36A より)

このようなフィラーとして「まあ」という共通語訳を与えられる形式には「マ (一)」、
のほかに「マ (ン) ズ」(6a)、「マ (ン) ジ」(6b)、「マ (一) ン」(6c)、「マン (ツ) ツ」
(6d)「ナン」(6e)「ネ」(6f)「ヤ (一)」(6g)「ヨー」(6h)が見られた。

- (6a) マンズ ゴエン ジューエンテバ エーホンダッタンベ。
まあ 5円[か] 10円 といえば いいほうだったろう。(『集成』岩手 107B)
- b. ソエデ フィニジー タデバ ケロット マンジ ナオルアゲヨ
それで 日にち[が] 経てば けろりと まあ 治るわけよ
(『集成』秋田 117A より)

- c. コシタコトモ マン ノサランヂャッタワゲ。
こうしたことま まあ 不運だったのだ。 (『集成』鹿児島 155C)
- d. ソノ、マンツ ジューニンナミンデア ナクッテモ
その、まあ、十人並みでは なくとも (『集成』岩手 8A より)。
- e. イッショクニ ヤッパ サンゴグラエ ナン フツノ モンジャデ。
一食に やっぱり 3合くらい まあ 普通の ものだから。
(『集成』富山 7A より)
- f. ションナイガト ネー ナラベテ コーバシー ンマイガト アルヨ。アンタ。
味の無いのと まあ 並べて おいしい おいしいのと あるね。あなた。
(『集成』富山 49C より)
- g. ヤ エンギ イーカラ ヨガッタケンドモ
まあ 縁起[が] いいから よかったけれども (『集成』北海道 229A より)
- h. ヨー イマジャ ソーユガオ ナンジャ ケーケンシトツサカイ
まあ 今では そういうのを 何だ 経験しているから
(『集成』富山 40A より)

「まあ」という共通語訳が与えられた「マ(ン・ー)ズ」は岩手、群馬、長野のデータに見られた。同様の「マ(ン)ジ」は秋田のデータに見られた。同様の「マ(ー)ン(ッ)ツ」は岩手のデータに見られた。同様の「マ(ー)ン」は石川、鹿児島のデータに見られた。ただし、「まず」「とにかく」「本当に」という共通語訳を与えている例もあり、それぞれの方言における各形式がみな共通語の「まあ」に相当するわけではない。「ナン」「ネー」は富山のデータに見られ、「ナン」には「全然」「いやあ」という共通語訳を与えている例もあった。「ヤ(ー)」は北海道のデータ、「ヨー」は石川のデータに見られた。

3.2.4 「もう」に相当する形式

共通語の「もう」は「既に」「じきに」「さらに」という意味をもつ副詞だが、そのように解釈できない(9)のような場合にはフィラーとして扱われる(山根 2002、中島 2011 など)。

- (7) モー ナカナカネー カザル ツッタッテ タイヘンデスモノネ。
もう なかなかねえ 飾る といっても たいへんですものね。
(『集成』東京 40B より)

共通語訳として「もう」を与えられた形式としては「ハー」(8a)、「ハイ」(8b)、「ハ(イ)エ」(8c)、「ヒャー」(8d)、「ヘー」(8e)がある。「モ(ー)」と、共通語訳として「も

う」を与えられた形式が合計 1093 例見られた。「ナ」が後接する例が兵庫、香川、宮崎、大分、福岡に見られた。「ネ」が後接する例が群馬、東京、京都、福岡に見られ、「サ」が後接する例が東京に見られた。他の形式には助詞の後接は少なく、千葉に「ハーネー」が一例見られたのみだった。

- (8)a. オリヤ ハー ホントニ ワゲ ワガンネ
 私は もう 本当に わけ[が] わからない、(『集成』岩手 2A より)
- b. ミンナ ハイ イノチガケデ トンデキタ
 みんな もう 命がけで 飛んで来た (『集成』長野 22A より)
- c. ドーチュワ ハエ マ コドモノ デッカイガンデモ ヤレル ワケダ。
 途中は もう ま コドモノ 大きい者でも やれる わけだ。
 (『集成』新潟 16A より)
- d. オラン ウチャ ヒヤー オラン ザエーショア オチャン ムカシカラ
 私の 家は もう 私の 郷里は お茶が 昔から
 イキヤーッキモンダンテサ
 多かったものだからさ (『集成』静岡 32C より)
- e. ヘー ヨルワ カナラズ クッタグライノ モンダカラ
 もう 夜は 必ず 食べたぐらいの ものだから (『集成』山梨 8C より)

「もう」と共通語訳される「ハ(一)」は岩手、宮城、栃木、千葉、群馬、長野、山梨、静岡、愛知、広島、山口のデータに見られた。同様の「ハイ」は長野のデータ、同様の「ハ(イ)エ(一)」は長野、新潟のデータ、同様の「ヒヤー」は静岡のデータ、同様の「ヘー」は山梨のデータで見られた。

3.2.5 「あれ」「なに」を含むフィラー

「あれ」は指示詞だが、(9a)のように指示することなく使われることがある。(9b)においては「アレ」が特定の動詞を指示しているが(9a)ではそうではなく、後続の内容を言語化するための時間を話者に与えているので、(9a)のようなものをフィラーとして調査した。

- (9)a. トニカク アレネ ムカシノ ヒト ッテノワ ウルサイデシタネ
 とにかく あれね 昔の 人 というのは うるさかったですね。
 (『集成』東京 76B より)
- b. チョーナイオ ミンナ アレ スル ワケヨネ。
 町内を みんな あれ する わけよね。(『集成』東京 107A より)

このような形式には「あれ」のほか「なに（なん）」が用いられる場合もある。「なに（なん）」も本来の疑問詞としての機能を持たず、フィラーとして機能する。「あれ」類には「アレ」(9a)(10a)のほか「アイ（アエ）」(10a)、「アッ」(10b)「アー」(10c)が見られた。「なに」類には「ナニ」(10d)のほか「ナン」(10e)「アン」(10f)が見られた。

- (10)a. ヤッパリー アノ アイダ、アレダッタンダベモン ムゴド シェバヨ、
やっぱり あの あれだ。あれだったんだらうよ。婿とすればよ、
ダンナドノド シェバ カワイー ニョーボノ ネガオー ミナガラ
旦那様と すれば かわいい 女房の 寝顔を 見ながら
コー オギダンダベオ コッソリドー、ウン。
こう[=起こさないように] 起きたんだらうから。 こっそりと、 うん。
(『集成』岩手 75B より)
- b. オッラ ジビキダッテ アッダヨー マイウエ ヨッポド キタヨー
俺は 地曳[網漁]だつて あれだよ 万祝い[を] よほど 着たよ。
(『集成』千葉 173A)
- c. ジューニン グライワー アーダネー
十人 くらいは あれだね (『集成』栃木 221A より)
- d. モー ナニヨ ドテ コシソーナンヨ
もう 何よ 土手[を] 越しそうなのよ (『集成』徳島 75A より)
- e. ヘーケー ナンジャー ヘーデ アノ ナンジャロー アレモ テンサクニ
だから なんだ それで あの なんだらう あれも 転作に
ナルンジャロー？ キューコーデンノ。
なるのだらう？ 休耕田の。 (『集成』岡山 118A より)
- f. アンダヨ オレタチミテ ミンナ キモンデ ハオリダッペー？
何だよ 俺たちみたい みんな 着物で 羽織だらう？
(『集成』千葉 1A より)

また、佐賀県のデータでは「あれ」でなく「あんなの」に相当する「アガント・アギヤント」が使われる例が3例見られた。1例を(11)に挙げる。「あんなだらう」という共通語訳が与えられているが、聞き手の今までの苦労を思いやる場面であるので、「あれだらう」という共通語訳をするべきだと思われる。

- (11) ホンナコト タイテー アギヤントヤロー。ホネ オンサッターロー。
本当に 相当 あんなだらう。 骨 折られただらう。
(『集成』佐賀 159A)

このような形式がどのように分布するかを調べると次の表のようになり、西で「ナン」が優勢であることが見てとれる⁵。地点ごとに数が大きく異なるのは、話者と話題の影響が大きいことが考えられる。

表4 フィラー「あれ」「なに」の分布

	アレ	ナニ
北海道	1	0
岩手	4	0
秋田	1	1
宮城	0	2
山形	3	0
栃木	5	0
埼玉	1	7
千葉	4	5
東京	2	0
神奈川	1	1
群馬	66	2
新潟	7	0
長野	4	0
山梨	2	3
静岡	4	0
岐阜	5	0
愛知	18	0
三重	0	1
石川	0	3
福井	0	1
京都	3	3
滋賀	0	9
奈良	1	1
和歌山	0	1
大阪	0	8
兵庫	0	1
島根	0	1

⁵ 『NHK 全国方言資料』山梨県南巨摩郡早川町奈良田のデータには、「モン」が使われる例が見られる。

(i) アノ モンダッキヨ。
あの あれでしたよ。(p.417、類例 11 例)

岡山	0	23
広島	0	4
山口	0	28
香川	1	30
徳島	0	16
愛媛	0	11
高知	0	28
大分	1	2
宮崎	0	3
佐賀	4 (うちアギヤント3)	0
鹿児島	2	0
合計	141	195

3.2.6 「ほら」に相当する形式

共通語でも用いられる「ほら」の原義としては話し手にも聞き手にも視覚による確認が可能なものへ聞き手の注意を喚起するというものである。それが話し手・聞き手双方の知識の中にあるものを聞き手に思い起こさせる形式として機能する。しかし、次のように時間稼ぎの側面もあるため、フィラーと考え調査した。

- (12) ソレカラ アノー ホラ ホーズキイチガ アッタデショー。
それから あのう ほら ほおずき市が あったでしょう。
(『集成』東京 116B より)

「ほら」という共通語訳を与えられた形式としては「ホレ」(13a)、「ソラ」(13b)、「ソレ」(13c)、「ハラ」(13d)、「ハー」(13e)、「キヤー」(13f)、「メーデ」(13g)、「ホイ」(13h)、「ホー」(13i)、「アレ」(13j)、「レ(一)」(13k)、「ロ」(13l)、「ワヤ(ワイ)」(13m)が見られた⁶。これらを含めた「ほら」類は『集成』のデータに409例見られた。

- (13)a.ヘーデ アノー ソノトキニヤ ホレ サンニンデ オチャワ オラン
それで あのう その時には ほら 3人で お茶は 私たちが

⁶ 『集成』のデータの「コレ」には(i)のように「ほら」という共通語訳を与えるべきと思われる例も見られたが、本稿では「ほら」という共通語訳を与えられていないものは含めていない。

- (i) イマワ コレ ヒコージョーガ アー ヒコージョーニ ナッチャッタカラ
今は これ 飛行場が あー 飛行場に なってしまったから
ヤマモ ナクナッチャッタカラネ?
山も なくなってしまったからね、 (『集成』茨城 9B より)

ツムダッキ

摘むのだった。(『集成』静岡 29C より)

- b. ソイカラ ズクズク ソラ ダイチュワ モー ハッキリ オボイエンバッ
それから 続々 ほら だれというのは もう はっきり 覚えていないが
(『集成』鹿児島 3A より)
- c. ソレ、オットン ナッタ ストァ ムグズンダンペー。
ほら、夫に なった 人は 無口だろう。(『集成』岩手 112A より)
- d. ハラ アイモ ヒトッ ブタイヂヤッタ。
ほら あの人も 同じ 部隊だった。(『集成』鹿児島 65A より)
- e. イマノ ハー X16 ドンカタ。
今の ほら X16 さんの家。(『集成』熊本 245C より)
- f. アー ソーダケン キャー、ズキ キャー、イケンヤー ナッテシマウガナ。
ああ そうだから ほら、すぐ ほら、 だめに なってしまうよ。
(『集成』鳥取 26B より)
- g. メーデ オレタチワネー オトコッキョーダイガ オーイズラ？
ほら 俺達はねえ 男兄弟が 多いだろう？
(『集成』山梨 3B より)
- h. インゲンダトカ シロイモダトカネ、ホイ サツマイモモ アルシネ、
いんげんだとか 里芋だとかね、 ほら さつまいもも あるしね、
(『集成』山梨 7B より)
- i. アノー ナンテッタッキ ホー。
あのう なんとといったつけ ほら。(『集成』静岡 187C より)
- j. イマ アレ ホーモツカンネー ベズニ チャント タデダガラ。
今は ほら 宝物館[を]ね 別に ちゃんと 建てたから。
(『集成』宮城 24B より)
- k. レー スガグダ ハゴコ ショッター
ほら 四角な 箱[を] 背負って (『集成』青森 21B より)
- l. アエノ ワラハンドワ ミンナ ロー ソーユー ゴト スタモンダ。
ああいうの 子どもたちは みんな ほら そういう こと[を] したものだ。
(『集成』青森 82A より)
- m. ソギヤ ユーテ ワヤ ヤッパイ ワイ ユーテ ワヤ。
そんなふうに 言って ほら やっぱり ほら 言って ほら。
(『集成』熊本 261C より)

「ホレ」は北海道、青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島、茨城、栃木、埼玉、東京、神奈川、静岡、富山、石川、福井、兵庫、岡山、徳島、福岡のデータで見られた。「ソ

ラ」については鹿児島データの「ソレ」については岩手、長野のデータでそのような例があった。「ハラ」は熊本、鹿児島データで見られた。「ハー」は熊本データで見られた。「キャー」は鳥取データで見られた（話者が二名で、二名ともが使用。また、「オッキヤ」という変異形も一例あった）。「メーデ」は山梨データで四名の話者のうち一名のみが使用していた。「ホイ」は山梨と静岡データでそれぞれ一名の話者が使用していた。「ホー」は静岡データで一名の話者のみで使用していた（「ホイ」を使用した話者とは異なる）。「ロ」は青森データで見られた。「ワヤ（ワイ）」は熊本データで見られた。「ほら」という共通語訳を与えられた「アレ」は岩手、宮城データで見られた。「ほら」という共通語訳を与えられた「レ（ー）」は青森データで見られた。なお、「ほら」類に終助詞が後接することはほとんどなく、「ホレサ」が静岡データの1例、「ホラナター」⁷が佐賀データの1例あるのみだった。

「キャー」「メーデ」という形式は他の形式との形態上の共通点がない。「メーデ」については類似の形式が見いだせていないが、「キャー」については1952年から約20年にわたって収録された『NHK 全国方言資料』（以降『NHK』）の鳥取県倉吉市国分寺のデータに「キャ」が6例あり、「つい」「ただ」という共通語訳を与えられている。類似形式として『集成』島根のデータで見られる「ケ（ー）」があり、『集成』島根の注13に適切な共通語訳が難しい形式で「こう」を与えたとある。『全国方言辞典』「けー」の項には次の記載があるが、「ほら」にあたる①の語義と④の語義が同音語であるならば、(14)のような『集成』島根の「ケ（ー）」は①との関連を考えた方がよいように思われ、そうであれば『集成』鳥取の「キャー」の関連形式と考えられる。

けー [副] ①人に物など見せる時の詞。「けーこんなになった」新潟県西蒲原郡。[略]
④つい。「けーしました」鳥取県日野郡・島根県能義郡。

(14)イマンゴラ ケー、ムカストワ ツガッテ テゴヤナンカ ジャーン
最近は こう、昔とは 違って 手伝いやなんか 十分に
サシェンコニ ホンニ ケー、ベンキョー ベンキョーバッカ ユーダケン
させないで 本当に こう、勉強 勉強ばかり 言うから
（『集成』島根 78B より）

「ほら」類は399例あったが、『集成』では昔の生活が話題となるため、聞き手の記憶を喚起するような発話が多く、話題の性質上「ほら」類が多くなっている可能性がある。

⁷ 佐賀のデータには「ナター」「ナンタ」など、二人称代名詞が助詞化したと思われる例が見られる。第6節を参照のこと。

4. 「見よ」という意味の語彙形式のフィラー化

語彙項目からフィラー化したものを見ると、方言の中には共通語とは異なるフィラー化が見られる。一部方言においては「見よ」という意味の形式が共通語や他方言の「ほら」類と同様視覚からの派生を見せ、「ほら」という共通語訳を与えられている例が熊本のデータに(15)を含めて2例あった。

- (15) ミナイ ソーシキヤラ コー アノー ヒトガ ウント アツマッテ
 ほら 葬式やら こう あの 人が うんと 集まって
 (『集成』熊本 313B より)

ほかに、『集成』奈良県のデータにおいては二名の話者のうち一名のみが使用する「ミナハレ (ヨ・ナ)」(計8例)に「ごらんない(よ・ね)」という共通語訳を与えられているが、「ほら」と共通語訳した方が適切である。一例を挙げる。

- (16) イマノ シモイチノ ミナハレヨ。 ケンダイカイヤッタカ アノ アキツソーエ
 今の 下市の ごらんないよ。県大会だったか、 あの 秋津荘へ
 イキマシタヤナ
 行きましたよね。(『集成』奈良 64B より)

『NHK』は『集成』より早い時期に収録された方言資料だが、奈良県、鹿児島県の調査地点で「見よ」という意味の形式に「ほら」という共通語訳を与えられている例(17a-b)、長崎県の調査地点で「ほら」と共通語訳すべきと思われる例(17c)が見られる。これらはみな聞き手の記憶にあると思われる昔のことを思い起こさせる際に使われている。

- (17)a. ミサ テーデ ヒトワズカ ブチコ ブチコト イネムリハンブンデ
 ほら 手で 一把ずつ ぶつつ ぶつと (音を立てて) 居眠り半分で...
 (『NHK』 奈良県山野へ郡都祇村旧都介野村 p.337 (加えて類例2))
- b. バンニ ナット ミテゴラン フユドマ ソバンコウイガ
 晩になると ほら 冬などは そば粉売りが...
 (『NHK』 熊本県熊本市中唐人町 p.260)
- c. オンドンガ ホッチョッカ トキヤー オマイドム ナカマデ ミナイ、
 わたしたちが 小さい ときは、 おまえたちの 仲間でも みてごらん、
 オナゴドマ アノ キャクヤノ エンデ テマルツキ テューテ
 女の子たちは 客屋の 縁側で 手まりつき といって
 (『NHK』 長崎県北松浦郡中野村 p.214)

さらに注3で言及した香川の「ゴラン」そして「ゴラン」に由来すると見られる「ゴ(一)」は「見よ」という意味の語彙形式由来の形式が「ほら」ではなく「ね」と共通語訳されるものになっている。原義を考えると、「ほら」と同じ機能をもつようになって、その後で「ね」と同様の機能を獲得したと思われる。

「見よ」という意味の語彙形式由来の形式としては『NHK』鹿児島県肝属郡高山町麓の「ミヤイ」、『NHK』鹿児島県鹿児島市「ミヤー」「ミナー」、『NHK』鹿児島県枕崎市鹿籠「ミヤイモ」、『NHK』宮崎県東臼杵郡南方村「ミヤー」が見られる。

5. フィラーの助詞化

本稿では音韻的に独立したものをフィラーとして扱っているが、方言の中にはフィラーがその音韻的な独立性を失って前の要素に依存している場合が見られる。『集成』のデータでは鹿児島の「ほら」に相当する形式、佐賀の二人称代名詞にそれが見られた。

鹿児島の「ほら」に相当する形式については(18a)のように文末に現れる例が多いが、(18b)のように文中に現れる例もあった。(18a,b)では「ハラ」と発音されているが、(18d)のように前接する形式に音韻的に融合している場合も見られ、合わせて31例見られ、(18e)のような「ホラ」4例、(18f)のような「ソラ」2例も見られた。終助詞「ナ」が後接する例が1例(18b)、(18c)のように文末に「ニー」が後接する例が5例あった。鹿児島のデータで音韻的な独立性を保っている「ハラ」は15例あり、うち1例で「ニー」が後接した。

(18)a. ミンナ イッショーケンメーチャッタハラ。

みんな 一生懸命だったよ。 (『集成』鹿児島 223C より)

b. マー ソノ アイガハラナ クスリオ ソン ナゴナッチョレバ ソン
まあ その あれがね 薬を その 長く なってれば その
コーカモ ウシカ チュトゴイヂェ

効果も 薄い ということで (『集成』鹿児島 170C より)

c. トートー マラリヤデ ケシンダンチャハラニー

とうとう マラリヤで 死んだのだよ (『集成』鹿児島 168A より)

d. オロ ソラ タイヘンチャラ

おお それは 大変だ。 (『集成』鹿児島 268B)

e. モロガー ナッタチャホラ。

もらえるように なったのだよ。 (『集成』鹿児島 189B より)

f. モー オモトトガマガセ ヒンナゲダッチャソラ

もう 冗談半分に 投げてしまったよ (『集成』鹿児島 452B より)

『NHK』鹿児島県枕崎市鹿籠のデータでも助詞化した「ハラ」「ソラ」が同じ話者に

よって使われている。

佐賀のデータには二人称代名詞が助詞化している例が(19a)のような文末に 57 例、(19b)のような文中に 3 例が見られた。音韻的な独立性をもっている例は「ナンタ」が一例だった。

- (19)a. アンタタチモ カイコサン カイヨンサッタロダンタ。
 あなたたちも 蚕[は] 飼っておられたでしょう。(『集成』佐賀 90A より)
- b. イマゴラーナンタ ジョーヨーニ ノッゴト ナッタローガ
 この頃はですね 乗用[トラクター]に 乗るように なったろうが。
 (『集成』佐賀 266A より)

二人称代名詞が音韻的な独立性を失って助詞化するにあたっては、まず元の意味を失ってフィラー化するという過程を経、その後で音韻的独立性を失いかつ助詞としての機能を獲得したと想定される。そしてその元の意味とは、命題的意味をもつ二人称代名詞ではなく、聞き手への働きかけとしての二人称代名詞である。方言によってはそのような二人称代名詞の働きかけの性質が弱まり、フィラーとしての性質が強くなっていく。『集成』では二人称代名詞の助詞化は佐賀のデータにしか見られないが、『NHK』では佐賀県佐賀郡久保泉村川久保のほか、熊本県熊本市中唐人町、熊本県上益城郡浜町、鹿児島県肝属郡高山町麓、山口県都濃郡都濃町(旧須金村)のデータに聞き手への働きかけの性質が弱まった二人称代名詞と二人称代名詞が助詞化したものが共に見られた。佐賀県佐賀郡久保泉村川久保の例を(20)、熊本県熊本市中唐人町の例を(21)、熊本県上益城郡浜町の例を(22)、鹿児島県肝属郡高山町麓の例を(23)、山口県都濃郡都濃町(旧須金村)の例を(24)に挙げる。(20b)、(22b)においては終助詞「タイ」、(21b)においては終助詞「バイ」に二人称代名詞が後接していると判断される。また、長崎県でも二人称代名詞の助詞化の報告がある(西島 1963、古瀬 1971、上野 1978)。

- (20)a. ホンニナ アンタ
 ほんとにね あなた (p.139)
- b. ケッコーナ モノタンター
 結構なものですよ あなた (p.139)
- (21)a. アー オハヨー アータ
 ああ おはよう あなた (p.262)
- b. ムゴー トシヨッタバイタ
 えらく 年とってしまいましたよ (p.267)
- (22)a. ヨロシュー アータ。
 よろしくね。(p.307)

- b. ハツタイター
終わりますよ、あなた。(p.308)
- (23)a. モー ゴーゴ キチョッテアッデ ハンナナー。
もう ごうごうと (水が) 来ているんですからねえ、あなた。(p.507)
- b. オトロシカッタ コトーチュ ワスレアナンハンナ
恐ろしかった ことといたら 忘れられませんよ。(p.516)
- (24)a. ナニーノーアンタ
なんですかあなた (p.202)
- b. ナニーノンタ
なんですね、あなた (p.212)

働きかけの性質が弱まった二人称代名詞にも助詞化した二人称代名詞にも待遇の機能があるとしばしば指摘される。そのような方言においてこの過程は聞き手への働きかけという話し手の自発性にもとづく機能から聞き手への待遇の表現という話し手の自発性の関与しない機能への変化である。ただし方言によっては、そして形式によっては助詞化した二人称代名詞の待遇の機能は弱い。文中のフィラーは発話のプランニングのための時間稼ぎが重要な機能だが、そのような形式が文末に現れ、固定化する場合にはその他の機能を表現する必要があるためと思われる。

7. 結び

本稿では方言話者による自由発話のデータベースである『集成』を学会講演・模擬講演、職場での会話という他の談話タイプと比較し、自発性の低い談話で「エ」の比率が相対的に高く、フォーマルな場面で「エト」の比率が相対的に高く、インフォーマルな場面で「アノ」「マ」の比率が相対的に高いことを見た。さらに、諸方言でどのようなフィラーが『集成』のデータに見られるかについて述べた。第4節では共通語では見られない「見よ」という意味の語彙形式のフィラー化が九州、奈良で見られることを指摘した。第5節では「ほら」にあたる形式の助詞化が鹿児島で見られること、二人称代名詞の助詞化の報告が佐賀のほか熊本、鹿児島、長崎、山口の各県についてあることを指摘し、これらの方言で二人称代名詞が聞き手への働きかけという話し手の自発性にもとづく機能を弱めフィラーとなったと述べ、助詞化した場合にはフィラーから助詞化したと主張した。

参考文献

- 上野智子(1978) 「長崎県西彼杵半島方言の文末詞 一複合の諸相と複合の法則一」『国文学攷』76号 p.1-12 (井上史雄他編『日本列島方言叢書 25 九州方言考 3』p.378-367 再録)

- 遠藤織枝・本田明子(1998)「自然談話データ『女性のことば・職場編』による談話研究の実例と利用法」 言語処理学会第4回年次大会発表論文集 pp.394-397
- 太田健吾・土屋雅稔・中川聖一(2006)「講義・講演音声におけるフィラー、言い淀み、倒置の発生頻度の分析」『日本音響学会講演論文集』 pp.153-154
- 小磯花絵・間淵洋子・西川賢哉・斎藤美紀・前川喜久雄 「転記テキストの仕様 Ver.1.0」『日本語話し言葉コーパス』 附属文書
http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/manu-f/transcription.pdf
- 国立国語研究所(2001-2008)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』 第1巻～第20巻国書刊行会
- 古瀬順一(1971)「島原半島の助詞(その3)」『愛知教育大学研修報告 20 人文科学編』(井上史雄他編『日本列島方言叢書 25 九州方言考3』 p.430-444 再録)
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」 音声文法研究会編『文法と音声』 p.257-279 くろしお出版
- 東条操編(1951)『全国方言辞典』東京堂出版
- 中島悦子(2011)『自然談話の文法 ---疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞---』おうふう
- 西島宏(1963)「長崎県方言概観」『長崎大学学芸学部人文科学研究報告』12 p.34-41 (井上史雄他編『日本列島方言叢書 25 九州方言考3』 p.14-21 再録)
- 日本放送協会(編)(1999)『全国方言資料 CD-ROM版』1-9巻 NHK出版
- 野畑周・内本清貴・伊佐原均 「『日本語話し言葉コーパス』における文編集データについて」『日本語話し言葉コーパス』 附属文書
http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/manu-f/revision_data.pdf
- 前川喜久雄 「『日本語話し言葉コーパス』の概観 Ver.2.0」『日本語話し言葉コーパス』 附属文書(overview.pdf) http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/manu-f/overview.pdf
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
- Watanabe, Michiko (2009) *Features and Roles of Filled Pauses in Speech Communication*. Hituzi Shobo.